

国際会計人材ネットワーク第3回シンポジウム パネルディスカッション 「国際的な会計・監査プロフェッション に向けて」



本シンポジウムのパネルディスカッションは、「国際的な会計・監査プロフェッションに向けて」をテーマとして、以下の方をお招きして実施した。本稿は、その概要である。

〈モデレーター（兼パネリスト）〉

- 国際監査・保証基準審議会（IAASB）元メンバー

関口 智和氏（有限責任 あずさ監査法人 パートナー）

〈パネリスト〉

- 証券監督者国際機構（IOSCO）Committee 1（会計・監査・開示に関する委員会）議長
園田 周氏（金融庁 企画市場局企業開示課 国際会計調整室長 兼 総合政策局総務課 国際証券規制調整官・G20 準備室室員）
- 国際会計教育基準審議会（IAESB）メンバー

川村 義則氏（早稲田大学商学学術院 教授）

- 国際会計士倫理基準審議会（IESBA）元テクニカルアドバイザー

矢定 俊博氏（EY 新日本有限責任監査法人 シニアパートナー）

1. はじめに

パネルディスカッションの冒頭において、園田氏より、当日の議論の基礎となるグローバルな金融規制の枠組み及び関連する各国際的な組織の役割やそれぞれの関係について、特に会計・監査に焦点を当てた説明が行われた。

2. 各会議体の活動内容と最近の動向

続いて、各会議体の活動の概要及び最近の動向について説明が行われた。

まず、関口氏より、IAASB は、国際監査基準（ISA）等の開発を行っている組織であり、最近、主に以下のような取組みが行われていることが説明された。

- 2004 年～2009 年：新起草方針に従い、ISA や国際品質管理基準第 1 号について全面的な見直しを行うクラリティ・プロジェクトの実施

- 2009年～2015年：監査報告制度の見直し（「監査上の主要な検討事項」の記載要求の導入を含む。）に関する議論
- 2015年～：会計上の見積りの監査に関する基準の開発や、監査の品質管理に関する基準等の見直しに向けた取り組み

次に、川村氏より、IAESBは、国際教育基準の開発等により、職業会計士の教育水準を向上させるための活動を行う組織であり、最近、IES第7号「継続的専門能力（CPD）開発」の改訂に関する取り組みにおいて、学習成果をより重視するアプローチを導入すること等について議論してきた旨、説明が行われた。

続いて、矢定氏より、IESBAは、職業会計士が遵守すべき国際的な倫理規則を開発している組織であり、最近、非監査業務の同時提供の禁止に関する定めや監査パートナーのローテーションに関する定め強化等について議論してきた旨、説明が行われた。

最後に、園田氏より、主に国際的な金融規制当局により構成されるモニタリング・グループ（監査・倫理・教育基準等の設定主体のガバナンス監視機関）では、現在、国際会計士連盟（IFAC）による基準設定プロセスにおいて、監査基準や倫理規則が適切に実施されることを担保するためのガバナンスが構築されているかに関心事となっており、これについて見直しが実施されている旨、説明された。

3. パネリストの国際会議への参加を通じた経験談

次に、モデレータ兼パネリストの関口氏より、各パネリストが国際会議に参加した際にどのような経験をし、また会議に臨むにあたってどのような苦労があったのか、各パネリストに対してコメントが求められた。加えて、園田氏に対しては、IOSCO Committee1 議長の立場と

しての経験についても、コメントが求められた。

園田氏からは、多国籍の人材が参加する国際会議では、1対1でコミュニケーションを図る時と異なり、内容を理解できない時も聞き返すことができず、そのような中でも、自分の発言を行わなければならないことが非常に難しいと実感しているといった経験談が述べられた。他方、会議自体は、事前に参加者間で発言内容の確認を行うなど、日本の会議運営と似通っている点もある旨が述べられた。

IOSCO Committee1 議長の立場としては、英語を母国語とするメンバーと自身の英語力が異なる中、会議のゴールを見据えながら、メンバーが納得できる着地点に到着させなければならない点に苦労しているが、自分自身にとってよい勉強の機会となっているとのコメントが述べられた。

関口氏からは、国際会議は、バックグラウンドが異なる人々と意見交換を行うため、それまで気付いていなかった考え方の発見や、自分に足りない部分が明らかになる機会があり、有意義な経験をできるといった感想が述べられた。また、国際会議の場合、各国の基準や規則をベンチマークにしつつも、ゼロから積み上げて、概念に照らしながら考え方を構築していくこととなり、その点でやりがいのある業務ではないかという見解が述べられた。

矢定氏からは、国際会議には様々な国の人々が参加するため、中には英語の発音のなまりが強く、日本人では聞き取ることが難しいこともあるという経験談が述べられた。また、米国へ駐在した際には、日本と海外では会計監査を含め、ビジネスの実務が異なるため、日本と違う理由について考える機会を持てたことが、有意義な経験であったという旨が述べられた。

川村氏からは、国際会議では、相手の話を聞きながら話をするため、ワンランク上のコミュニケーション能力が求められること、話をする

際はパーフェクトな構文を作って話そうとせず、ポイントを考えつつ話しながら構成を組み立てていくことに心掛けていた旨が述べられた。また、IES第7号の改訂の際、国籍の異なる同僚と苦労を分かちあいながらプロジェクトを進めてきたことで、大きな達成感を得られた旨が述べられた。

4. 今後を担う人材へのエール

続いて、モデレータ兼パネリストの関口氏より、今後を担う国際会計人材ネットワーク登録者に向けてアドバイスやエールはあるかについて、各パネリストにコメントが求められた。

まず、川村氏より、英語のコミュニケーションスキルを向上させるためには、日ごろから英語の文献を読んだり、英文での執筆を行うことが有用であるという旨が述べられた。また、日本人同士で構わないので、日常的に英語での会話を行っておくことが、スキルアップに効果的ではないかとの旨が述べられた。

次に園田氏からは、英語力以上に発言の中身が第一であるとした上で、会計・監査のスキルをさらに磨いた上で、最低限の英語力をつけることが重要であるという旨が述べられた。また、国際会議の場でコミュニケーション能力を発揮するためには、どのようにしたらよいか、常日頃から自分で考えるようにしておくことが大切である旨が述べられた。

関口氏からは、振り子の絵を映しつつ、会計・監査の現場の実務で概念に照らしながら実務上の課題について悩みながら解決方法を出し出す経験を重ねるとともに、概念や理屈的な基礎を向上させるように自己研鑽に努めていくことが将来、国際会議に出た時にきっと役立つのではないかと考え方が述べられた。

矢定氏からは、相手の主張を聞く、議論を取

りまとめていくというのは、難しいことであるが、会議の場においていろいろな人に対して自分から働きかけを行うこと、積極的に発信していくことは、自分のできる範囲内で可能であるので、自分としては積極的に行ってきたし、そのようにしてはどうか、との考え方が述べられた。

5. 総括

最後に、モデレータ兼パネリストの関口氏より、各パネリストに対して、これまでの議論を踏まえた総括のコメントが求められた。

矢定氏からは、グローバルに適用する基準を開発する際は、各国の状況や文化、ビジネスに対する考え方が異なる中、見えないもの、例えば、参加者の見えないバックグラウンドなどについても考慮しながら議論を進めていくことが大事である旨が述べられた。

川村氏からは、①今日のシンポジウム参加を契機として、会計教育の問題にも関心を持って欲しいこと、②会計の専門職教育も含めて、大学や大学院との連携を深めて欲しいこと、③内外の学会を通じて何等かの活動をしておくことが国際会計人材にとって有用な経験となるのではないかと考え方が述べられた。

園田氏からは、チャンスがあれば恐れずに飛び込んでほしいこと、謙譲は美德ではなく、国際会議の場においては堂々と振る舞い、会議において他人の意見に流されたりしないことに留意すべき旨が述べられた。

最後に、関口氏からは、国際会議の場に出ていくためには、「興味」、「度胸」、「愛嬌」が必要であると以前申し上げたが、何よりも対象物に興味を持つことが大事であり、興味があることが見つかったら、それを突き詰めていくことが大切ではないかと考え方が述べられた。